

109 學年度第一學期 Eurasia 基金會國際講座

「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」 (7)

議題：アジアにおける漢字語彙の習得

第7回 Eurasia 基金会国際講座は、本校日本語文学系陳毓敏副教授による「アジアにおける漢字語彙の習得」である。本講座のポイントはアジアにおける漢字語彙の習得、とりわけ台湾人に焦点をあて、日本語の漢字をいかに学習するかを中心に進められた。陳教授はまず会場の教員と学生に自身の日本留学の契機について話し、それからなぜ漢字語彙を研究主題に選び、漢字語彙の対照研究、漢字語彙の習得研究へと進んだのかを語り、最後に漢字語彙を使ったゲームを紹介して、出席者へ漢字語彙習得研究の奥深さとおもしろさを教えてくれた。

最初に陳教授は文化大学日文系卒業後高校の日本語教師に就いたこと、その教育現場でさらに高い日本語能力の必要性を感じ、日本留学を決意したことを語った。日本の街角で見る看板の漢字から日中の漢字の字義の違いに気づき、これが研究の出発点となった。研究主題を構想していた頃、読み方に興味を持っただけでなく、中国語漢字の意味と違うものが非常に多いことを知り、さらに文献研究へと進んだ。漢字語彙の研究が「形」「音」「意味」の三つのタイプを包括していることを知って、「意味」の部分の研究することに決めた。陳教授はまず文献研究から過去の中日対照研究をたどり、主に以下の四種に分類した。

1. 構造研究：日本語は連体形態を主とし、さらに名詞＋名詞の形式が最も多い。中国語は形容詞＋名詞が多い。
2. 逆転現象研究：中国語と日本語の漢字は同じでも、配列が逆になる現象。
3. 品詞研究：中国語では動詞は自動詞にも他動詞にもなる。しかし、日本語では名詞と自動詞だけである。その他に中国語では形容詞になるところで、日本語は自動詞となる。中国語で動詞のところには日本語では名詞であるなどのタイプに分けられる。
4. 分類研究：日本の文化庁は1978年に日本語と中国語語彙2000個を対照し、その結果、「同義」が66.7%、「類義」と「異義」が25%、「欠落」が25%であることがわかった。

それから陳教授は漢字語彙の研究を紹介し、台湾人による語彙学習の方法を検討した。教授は台湾の大学生295名を対象に調査し、台湾人による語彙学習法が大体母語利用の学習法、記憶法、字典、その他（テレビ番組や漫画を見る、慣用法の暗記等）の四つに分けられるという結果を得た。主に第二言語習得を研究す

る陳教授は、特に第二言語習得理論の「転移」に言及した。これは母語に影響されて、学習上に転移されることである。細かく分けると次のものがある。プラスとマイナスの影響による①正の転移②負の転移。③回避（誤りを恐れ、日本語を使う際に意図的に回避する）。④過程的転移。⑤母語の習慣および文化により、外国語学習の際に文化の転移が起きる社会文化的転移。⑥中国語の漢字を過度に流用する使用過剰。⑦個人主観の心理的転移。

陳教授は横断面＝学習者のある特定時期の学習資料、縦断面＝学習者の長期的学習資料を用い、両面から調査した結果を示した。まず「中日同型語語義分類」には主に①同義語、②類義語 1、③類義語 2、④類義語 3、⑤異義語、⑥欠落語のタイプがある。陳教授はさらに欧米の第二言語習得の学習難易度の階層理論を利用して、原義の分離、新規、欠落、融合、一致等のタイプによって日中の漢字種類を新たに分類した。中国語と日本語の漢字の類義語には 123 種あり、相当程度類似しているが、使用頻度は異なる。以上の調査に基づき、教授は日中漢字を新たに次のように分類した。同義語、類義語 1（共通語義使用頻度が一致するもの）、類義語 2（類義語使用頻度が異なるもの）、異義語、欠落語 1（漢字から類推できるもの）、欠落語 2（漢字から類推できないもの）の六種。予測の難しいのは類義語 2、異義語、欠落語 2、やさしいのは同義語、類義語 1、欠落語 1 である。

以上の理論により、陳教授は台湾の日本語学習者を対象に、①語彙知識：母語訳テスト、②語彙運用：正誤判断テストに分けて実証調査を行った。その結果判明したのは、初級学習者の両測定には一致した傾向があり、予測の難易度階層が実証された。さらに上級の日本語能力の異なる学習者を測定すると、1 級学習者にはもう難易度階層が見られず、2、3 級学習者では難易度階層が初級学習者と同じであることがわかった。それから学習環境の違いによる比較も実証調査した。JFL＝在台学習者と JSL＝在日学習者に分けると、後者は 2 級取得でも、すでに難易度階層がない。以上の横断面研究から、日本語能力のレベルは中日語彙判断の誤差に影響し、学習環境の違いも影響することがわかった。縦断面の研究では台湾人の初級学習者の作文内容を分析すると、初級学習者は中国語の語彙 (Chinese) をそのまま、日本語の作文に持ち込むことが多く見られた。中、上級の学習者の作文を分析すると、①漢字語彙の誤りは日本語レベル、学年にかかわらずなくなる。②すべての種類の漢字語彙に誤りが生じている。③中国語の誤用が最も多く、上級学習者でもなくなる。④同義語の誤用の原因は中国語・日本語の品詞の違い、あるいは日本語にあっても違う語を使うことなどにある。⑤誤用と正用は同時に起きるなどの結果が判明した。講座の終わりで、陳教授は学生に対し学習に便利で、しかもおもしろい二つの漢字語彙ゲームを紹介し、実際に操作

させた。

(Web サイト:<https://Eurasia.pccu.edu.tw/faculty.php>)

(原稿:黄馨儀・日文系助理教授)

(日本語訳:塚本善也・日文系副教授)